

# ガンディーとタゴール

## ——サッティヤグラハの実践における友情——

宇野彩子

民衆と共に生き、インド独立運動を非暴力と真理の理想を掲げて導いた政治的指導者 M. K. ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869–1948) と詩人・芸術家としてアジア人初のノーベル文学賞 (1913 年受賞) を授与されたラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861–1941) は同時代人であり、近代インドを代表する二人の偉大な思想家である。二人は友人であったが、しばしば重要な問題について異なる意見を持ち、公的な場で激しい論争を展開している<sup>1)</sup>。違うということに焦点をあてたならば、この二人は出身地方が異なり<sup>2)</sup>、社会的階層も、宗教的背景も異なっていた<sup>3)</sup>。二人の風貌からしてタゴールとガンディーは大変対照的であり、その特徴は、ガンディーは「禁欲的」であり、タゴールは「生命の豊かさへの讃歌」である。そして主な活動領域も方法も異なっていた<sup>4)</sup>。

独立後インド初代の首相となったジャワハルラル・ネルー (Jawaharlal Nehru, 1889–1964) は世代的にはガンディーとタゴールの息子の世代であり、二人から身近に学び、深い尊敬の念をもっていたが、ネルーは二人が大きく異なっていることについて「ガンディーとタゴール、何と二人はインドそのものだろうか、同時に何と二人は互いに異なっていることだろうか！」と感嘆している<sup>5)</sup>。またタゴールの死にあたってネルーはタゴールの近親者に送った手紙の中で、「ガンディーとタゴールほど人が互いに大きく違うことはないのではないだろうか。しかし驚くべきことはこの二人が互いに共通性を持ち、同じ知恵と思想と文化の源泉から力を与えられていたにも関わらず、これほど大きく互いに違うということである。……あらゆる形でインドのエッセンスを現しているにも拘らず、それぞれインドの多様な性質を表現している、この二人の偉大な人物を一つの世代に生み出すことのできるインドの長い文化的な豊かさに思いを馳せる」と書いている<sup>6)</sup>。

ネルーの指摘から、二人はインドの多様性の豊穡性をそれぞれの形で世界に証言しているという理解を読み取ることができるのではないだろうか。この小論はさらに、この二人の友情こそがインドのメッセージを表現しているということを検討したい。

### 互いに支えあったタゴールとガンディー

今日的状況において意見や立場の相違はしばしば対立を生み出し、たとえ共通の目的をも

っていても些細な見解の相違によって分裂や争いが絶えないという例には事欠かないであろう。しかしガンディーとタゴールの場合、様々な相違や痛烈な批判にも関わらず、二人が1915年に初めて出会ってからお互いへの深い敬愛の思いに支えられた友情は終生変わらなかった。その印としてタゴールはガンディーへの手紙で常にガンディーを「親愛なるマハートマジー (Dear Mahatmaji)」<sup>7)</sup>と呼び、ガンディーは「親愛なるグルーデヴ (Dear Gurudev)」<sup>8)</sup>と呼んで互いに深い敬意を表明していた。そしてその手紙のやりとりはお互いに誠心誠意を込めて書いていることが読み取れるものである。

タゴールは自分の死期が近いことを自覚した時に、自分の後世への最大遺物として長年にわたって心血を注いできたヴィシュヴァ・バーラティー (現在のタゴール国際大学) をガンディーにゆだねる手紙を書いて手渡した。そしてガンディーもその思いを大切に受けとめて、自分のできる限りヴィシュヴァ・バーラティーが永続化するように協力することを約束した<sup>9)</sup>。またガンディーは、自らの信念に基づき祈りに導かれて決行した命がけの断食の場からタゴールへ手紙を書き、タゴールからの祝福をしばしば求めていた<sup>10)</sup>。

ドキュメンタリー *The Poet and the Mahatma* の中で最も印象的な場面の一つは、1940年すでに何度も重い病に倒れ衰弱していた最晩年のタゴールが久しぶりにシャンティニケタンを訪問したガンディーを迎えるときの実写記録である。歓迎の式典会場まで車いすで運ばれたタゴールが先に壇上に座っていたが、そこへガンディーが入ってくるなり、自力で立ち上がり、ガンディーがかがんでタゴールの足元をさわろう (インドでの最上級の敬意のしるし) とするのを押しとどめ、互いに手を握り、タゴールが花輪をガンディーの首にかけるというシーンである。お互いへの深い敬意と再会の喜びが画面からあふれるようであった<sup>11)</sup>。

また後述するように、タゴール亡き後、分離独立前後のコミュナリズム<sup>12)</sup>の深刻化によってインド各地で暴動が引き起こされ同胞が殺しあうという絶望的な状況の中で、和解と再生を求めて贖罪の巡礼者として歩いたガンディーが心の支えとしていた愛唱歌はタゴールの「ただ独り歩めよ」の歌であった<sup>13)</sup>。

このように、お互いに違う立場や文化的背景を持ちながら、お互いへの最大限の信頼と愛を注いだ友情関係で結ばれていたことを可能にしたのは何であろうか？

## 友情とサッティヤーグラハ

ここでガンディーにとっての「友情」について考察する重要性を指摘しておきたい。ミネソタ大学のアジェ・スカーリアは、ガンディーが運動の基盤としたアシュラム (共同体) の誓い<sup>14)</sup> から、ガンディーの目標は非暴力に基づいた政治 (politics of *ahimsa*) による国づくりであり、それをスカーリアは「隣人としてのナショナリズム (neighborly nationalism)」と呼び、近代的自由主義に基づいたナショナリズムと対比させて検討している。ガンディーの「隣人としてのナショナリズム」においては、日々のたゆまぬ非暴力的努力の積み重ねによって、様々な相違をもつ人々と隣人関係を結んでいくことが要請され、その過程は苦しみを

自らが引き受けること (*tapasya, suffering*) によって特徴づけられる。そしてスカーリアによると、隣人としての非暴力的な関わり方には自らと相手の関係によって三種類あるが、それは互いに平等な関係にある人同士においては友情 (*mitrara, "friendship"*) であり、自分と従属的關係にある人に対しては奉仕 (*seva, "service"*) を行ない、そして支配的關係にある人に対してはサッティヤーグラハ (*satyagraha, "civil disobedience"*) の方法をとる<sup>15)</sup>。

ここではスカーリアは、ガンディーの非暴力に基づいた政治に焦点をあてて、「サッティヤーグラハ」を、不正な関係を正す非暴力的な運動（市民的不服従運動など）を指す狭い意味で使っているが、実際にはガンディーは自分自身の生きることのすべての領域においてサッティヤーグラハを実践することを目指していた<sup>16)</sup> ので、広義におけるサッティヤーグラハは、前述した三種類の間人間関係すべてを包括するであろう。そして友情はその中でも非常に特別な関係である。なぜならば「平等の關係」とお互いに受けとめる關係というのは稀有であり、同時にあらゆる「隣人關係」において、「友情」は究極的な目標として理解されるからである<sup>17)</sup>。

そしてガンディーにとって友情は改革者の精神を持って接するものではなく、互いに違うことを受容して初めて成立するものであった<sup>18)</sup>。そしてそれは大変まれなものであると自叙伝の中でガンディー自身の反省を込めて述べている。ガンディーは若い頃あまり評判がよくなかった人物とあえて友人になり、彼によい影響を与えようともくろんだが、却って様々な悪影響を受けたのは自分自身であったと言う思い出を語り、相手を改革しようという友情は成り立たないと述べ、「真の友情は魂と魂の一致であって、そういう世界はまれにしかみつからない」<sup>19)</sup>と述べている。ガンディーとタゴールは真の友情關係は非常に貴重なものと知った上でお互いの友情を無二のものとして大切にし、互いに最も苦しい時に支えあいながら、時には率直に意見を表明し批判しあうという關係にあった。それはガンディーにおける三種のサッティヤーグラハの実践の中の最も理想とされる「友情」の具現化であったといえよう。

この友情を可能にした条件の一つはガンディーとタゴールが共有していたヴィジョンである。それはインドが伝統的に大切にしてきたものであり、真理に向かってひたすら歩むことを促すものである<sup>20)</sup>。森本達雄氏は二人を「古来インド人が人間や思想を評価する上で一番大切にしてきたもの、すなわち、その人が真理の探究者、真理の体現者であったかどうか」の観点から見て普遍的な意味の証言者であるからこそ今日も世界的に意味あるメッセージの発信者として広く尊敬されていると指摘している<sup>21)</sup>。ここで一つの手がかりとして、インド古来のヴィジョンをタゴールは仏陀の生涯に見ており、タゴールがしばしばガンディーの理想と仏陀の教えを重ねて見ていたことを指摘しておきたい。例えばタゴールはガンディーが1919年に全インド的な規模での政治運動（ローラット・サッティヤーグラハ運動）を開始するにあたって手紙を送り、その中で次のように述べた。「この危機的状况において、あなたは我々の間で人々の偉大な指導者としてインドの理想への信念を宣言して立ちあがっ

た。……あなたは仏陀（釈尊）がご自分の時代に語られ、そして時代を越えて語られているように、言った、『怒りに対しては怒らない力によって、悪に向かっては善の力によって、打ち勝つべし』（“Conquer anger by the power of non-anger and evil by the power of good.”）と」<sup>22)</sup>。またガンディーの伝記を書いたアメリカ人のジャーナリスト、ルイス・フィッシャーとの対話の中でもタゴールは後年次のように述べている。「たぶん彼（ガンディー）も、仏陀やキリストが人間に悪を捨てさせるのに失敗したように失敗するだろうが、生涯を今後の時代への教訓とした人として、永遠に記憶されよう」<sup>23)</sup>。こうしたガンディー理解に立った上で、タゴールは厳然としてガンディーとの意見の相違について公的に表明する文章を発表したのであった。

この真理追究（ガンディーの表現ではサッティヤグラハ）の過程で明らかになるのは生き方としての徹底的な非暴力・愛であり、その目指すところは、すべての人が自らの尊厳を回復し自分のいのちの意味に目覚めるというスワラージ（*Swaraj*, 自治）の実現である。具体的にはインドの農村が再生され、植民地支配の政治的・経済的・文化的な重荷と依存から脱却し、非人間的な差別や搾取がなくなるようにインドの人びとが互いに奉仕することであった。そしてこのような社会を実現するために具体的な教育が決定的に重要であるというヴィジョンも共有していた<sup>24)</sup>。このヴィジョンに向かって二人は出会う前からそれぞれアシュラム・祈りを中心とした共同体の実験を行っていた<sup>25)</sup>。

ガンディーは1893年から1914年まで21年間にわたって南アフリカで活動し、そこで自分自身の召命を「奉仕者」と自覚し、サッティヤグラハの実験を積み、その経験からサッティヤグラハの実践をインドで実現することを夢見てインドへ帰国することを決意した。南アフリカを去るにあたって、ガンディーは自分の政治的師と仰いでいたG. K. ゴーカーレー（G. K. Gokhale, 1866–1915）<sup>26)</sup>に会うためにイギリスへ渡ったが、先にインドへ帰国させたフェニックス農園の子供たちはインドでのガンディーの活動拠点ができるまで、タゴールのシャンティニケタンに滞在した<sup>27)</sup>。ガンディー自身も1915年1月にインドへ帰国し、2月に初めてシャンティニケタンを訪問している。タゴールに会ったのはその後3月の2度目のシャンティニケタン訪問のときであるが、このよるべないフェニックス農園のメンバーが暖かく家族のようにシャンティニケタンに迎えられたという経験からタゴールとガンディーの信頼の絆は出発している<sup>28)</sup>。

この時タゴールは53才でありすでにノーベル文学賞を授与されて世界的な文学者として知られていたが、シャンティニケタンはまだ設立して15年経っておらず実験的段階であった。ガンディーは45才で南アフリカでのインド人の人権擁護運動での指導者としてインドで知られつつあったが、インド全体の指導者としては全くの未知数であった。1915年1月にタゴールはガンディーにフェニックス農園の子供たちをシャンティニケタンに預けてくれたことを感謝する手紙を送り、「あなたのこの子供たちが同時に私たちの子供たちとなることを可能にしてくれたことを感謝します。彼らは我々の生涯のサーダナー（修行の道）にお

ける生きた絆 (a living link) となってくれるでしょう」と述べている<sup>29)</sup>。そして二人の友情はこの暖かい出発点から生涯続いたのである。

もう一つガンディーとタゴールの友情を支えたものは英国人 C. F. アンドルウズ (Charles Freer Andrews, 1871-1940) の存在である<sup>30)</sup>。実はフェニックス農園のメンバーがシャンティニケタンで滞在した背景にはアンドルウズの存在が大きく働いていた。

#### アンドルウズ、タゴール、ガンディー

アンドルウズはガンディーの最も親密なイギリス人の友人として知られている<sup>31)</sup>が、ガンディーに出会う前にタゴールと深く関わっていた。アンドルウズはイギリスで大学生時代に「貧しい人々への奉仕」を自分自身の使命とし、1904年にインドへ宣教師として渡り、デリーのセント・ステイブンズ・カレッジで教鞭を取った。そこで同僚のインド人を始めとした様々な出会いに導かれてインドとの対話を深めていたが、一時帰国中1912年にイギリスで初めてタゴールに出会い、深く共鳴した<sup>32)</sup>。その後アンドルウズはタゴールをグルー(師)と仰いでシャンティニケタンへ居を移して教育における実験に加わるという思い切った行動をとっている。

さらに、アンドルウズは1914年にゴーカーレーに触発され、タゴールにも祝福されて、南アフリカでガンディーが指導していた在留インド人の尊厳を守るための運動を支援するために南アフリカへ赴いた<sup>33)</sup>。そしてそこで人種も文化的背景も宗教もことなるガンディーと兄弟として出会い、この二人の友情もその後終生支え合い学び合う関係へと深まっていくものとなった<sup>34)</sup>。

アンドルウズは南アフリカ到着間もなくタゴールへ書いた1914年1月の手紙において、ガンディーとタゴールの立場は基本的に同じであったので自分はすぐにそれを理解し受け入れることができた、と述べている。アンドルウズによるとそのエッセンスは「真の独立、精神的な力によって立つこと、現世的な権力に立ち向かって何ものも恐れぬ勇氣、そしてその心底にはすべての人への深く燃えるような愛がある」とまとめている<sup>35)</sup>。

これはアンドルウズがガンディーと出会った直後の直感的な理解であるが、この後のタゴール、ガンディー、アンドルウズ三人の生き方を貫いているエッセンスであり、意見の対立をも互いに尊重するときに常に根底にあり、様々な困難を乗り越えるときに互いに励まし合いながら、生涯をかけて追究した目的であるといえよう。これはサッティヤグラハの特徴を表しているが、これこそがインドの源泉からのメッセージであり、それぞれの形でガンディーもタゴールもアンドルウズもそれを実践したのである。

アンドルウズはタゴールやガンディーについて精力的に著作を出版し、それぞれの特徴や相違をとらえながら、基盤にある共通性を明確にしてきた<sup>36)</sup>。そして個人的にも二人の間に入って互いの関係を取り持つという役割を果たしてきた。タゴールとガンディーはそれぞれを支えた共通の真の理解者アンドルウズの献身的な働きによって、その友情を持続させ深

めることが可能であった。

アンドルウズは国籍や人種に拘らず、あらゆる困窮している人々のために世界各地を奔走してインドの民衆から Deenabandhu (デーナバンドウ・貧者の友) の尊称を与えられたが、同時に敬愛の気持ちを込めて「ハイフン (-)」とも呼ばれた。それはイギリスとインドという植民地支配によって支配-被支配の関係におかれ、悲惨のうちに引き裂かれた人々の間にたって互いに結びつけるという困難な役割を身を挺して実践していたからだが、その特質はガンディーとタゴールを結びつけるということでも多いに発揮したのだった。

タゴールとガンディーという二人の偉大な、そして大きく異なる人物の接点として働き続けたアンドルウズは 1940 年にカルカッタで亡くなった。その死はタゴールとガンディーによって共に深く追悼されたが、アンドルウズの死にあたってのタゴールとガンディーの発言はそれぞれのアンドルウズ理解、ひいてはそれぞれにとっての生きる意味について集約したものとなった<sup>37)</sup>。

タゴールは 1940 年 4 月 5 日にシャンティニケタンで行なわれたアンドルウズの告別式において、アンドルウズのシャンティニケタン、そしてインドへの献身的愛を感嘆し「それは苦難の愛で、身を安全圏においてのそれではなく、インドの悲惨のただ中で、喜び悲しみ、幸、不幸をインド人、特に貧しい侮蔑された人々と共にするものであった。……アンドルウズのインドへの愛はインドに限定されるのではなく人類を意識しており、その根は神の愛であった」<sup>38)</sup>とアンドルウズの生涯の意味をまとめている。アンドルウズは神の愛を根源として献身的な無私の人類愛を実践したのであった。

そしてタゴールはさらに「アンドルウズにあって、インドと英国は結ばれていた」と述べ、「タゴールにとってアンドルウズは、英国の意味のみならず、インドの意味、人類の意味の証言者であった。この課題の為に捧げられたアンドルウズの生命は不滅で、現在もわれわれと行動を共にしている」と考えていると述べている<sup>39)</sup>。

ガンディーはアンドルウズの追悼記事「C・F・アンドルウズの遺産」<sup>40)</sup>において、アンドルウズの死は英国、インドのみならず、人類がその真の一員、奉仕者を失ったことを意味すると述べた。ガンディーにとって、またアンドルウズにとって、「奉仕者」として徹底的に愛に生きることは自らの召命として意識され、その生涯はその招きに一心に応えるものであった。そしてその生き方はタゴールも共有していたが、大変な困難な、神(真理)への巡礼者としての道筋であった。

アンドルウズの知的遍歴に焦点をあてて三つのレベルのインド理解を提示した葛西實氏は、アンドルウズとガンディーとタゴールのまじわりを通して提示されているのは第三のレベルでのインド理解であり、そこで真の人類意識が生まれ、人々の悲惨を自分自身に引き受けて、共に歩むということがアンドルウズの生涯をかけた証言であった。「アンドルウズは真の英国人であったので、真のインド人になった」、そして南アフリカで「兄弟として会って以来、その関係は終生かわらなかった。その関係は一人の英国人と一人のインド人との間

のことでなく、二人の求道者、奉仕者のまじわりであり、それは不滅のきずなで結ばれ二人の間にへだたりはなかった。ガンディーは人間としての自覚は、民族・文化・社会の相違を越えた求道者、奉仕者のまじわりとして展開することを明確に意識している」と葛西氏はガンディーのアンドルウズ理解をまとめている<sup>41)</sup>。

1940年に最後に会ったとき、アンドルウズのガンディーへの言葉は「モハン、スワラージ（自由・独立）は近い。英国人とインド人が望むならば、それを実現させることができる」<sup>42)</sup>であった。この発言の歴史的背景として考慮しなければならないのは、当時のインドのおかれている状況はむしろ圧倒的な闇であり、第二次世界大戦のさなか武力による正義が正当化され、植民地支配体制は一層強化され、スワラージの実現への希望は打ち砕かれているような時代であった。にも拘らずアンドルウズがこのような発言を確信を持ってガンディーに語ったということの一つの問題提起として葛西氏は提示している<sup>43)</sup>。

ここでのスワラージとは何か？ 葛西氏によると「このスワラジの道は人間の道であり、アンドルウズはその道を歩んだ一人の先達であり、アンドルウズの証言は英国、インド、人類の心ある人々の間では不滅であるとガンディーは確信している」<sup>44)</sup>。

このようにタゴールとガンディーのエッセンスを理解し共有したアンドルウズが二人の相異なる偉人たちのお互いの理解を深め、揺るがぬ絆を強めてきたのである。そこで共有された基本的立場はサッティヤグラハ、真理追究の道筋であり、圧倒的な闇にも拘らず非暴力によって闘い続けること（スカーリアの意味でのサッティヤグラハ）、苦しんでいる人々と共に苦しむこと（奉仕）、そしてその根源は神の愛である。このような苦闘における希望は、友情であったが、それは実にまれなものであった。

### ガンディーから見たタゴール

最後に、こうしたことを踏まえてガンディーから見たタゴールはどのようなものであったであろうか。

1941年8月にタゴールが亡くなった時にガンディーは次のような追悼文を寄せている。「ラビンドラナート・タゴールの死によって我々はこの時代の最も偉大な詩人を失っただけでなく、人道主義者である熱烈な愛国主義者を失った。タゴールはあらゆる公的な領域の活動に関わり強烈な個性を刻印として残した。シャンティニケタンとシュリニケタン（農村改革運動の拠点）にはインド全体、いや世界へのタゴールの遺産が残されている。この高貴な魂が安らかに眠られますように。そしてシャンティニケタンをこれからになっていく人びとがその肩に負っている重責にふさわしい働きをされますように」（「R. タゴールへの賛辞」1941年8月7日）<sup>45)</sup>。

ここでは行動の人としてのタゴールが強調され、タゴールの生涯をかけた世界への最大の遺物をシャンティニケタンやシュリニケタンにガンディーは見ている。

さらにガンディーは『サルボダヤ』誌に寄せた記事「グルーデヴ」（1941年8月30日）

ではタゴールとガンディーを結びつける目的としてのサルボダヤ（すべての人々の幸福、Welfare of all の意味）に言及し、タゴールもその実験の過程で亡くなり、残された人びとが後世への普遍的な贈り物としてのシャンティニケタンやシュリニケタンを維持していくことを訴えて次のように述べている。

サルボダヤとは全てのもの（サルヴァ）の上昇（ウダヤ）を意味する。グルーデヴもインドを通して世界に奉仕することを切望し、その途上で息をひきとった。彼は亡くなったが彼の実験は未完である。彼の肉体はこの世にはないが、彼の魂は、我々の魂もそうであるが、永遠である。この意味ではすべての魂は不滅であり死ぬということはなく、生まれるということもない。しかしグルーデヴが生き続けるという時それは特別な意味がある。彼の諸活動は普遍的であり、利他主義的であったが、それらを通してかれは不滅である。シャンティニケタン、シュリニケタン、そしてヴィシュヴァ・バーラティーは全て一つの運動の具体的な現れである。これらはタゴールの魂であり、これらのためにデーナバンドゥ（C. F. アンドルウズ）はこの世を去り、そしてグルーデヴも続いた。亡くなった後どこにいるとしても彼はこれらの行く末を見守っているであろう。これらを維持することこそが本当に我々の敬意の表明となるであろう。<sup>46)</sup>

このように、ガンディーはタゴールを普遍的な目的への歩みの同志として、人類愛に生きた奉仕者として敬愛していたのであった。具体的な意見の相違をはじめとした違いはこの原点にたった時には尊重され、それ故に真の友情が結ばれ、深まったのである。

最晩年のガンディーは宗教対立の嵐がインドを引き裂き痛ましい暴動が各地で起こっている中で、タゴールの歌「ただ独り歩めよ」の歌を心の友として、ベンガルの農村ノアカリを歩いたのであった。人生をかけた大切な夢・ヴィジョンが人びとによって拒否され無惨に踏みじられ、闇の中で歩みつづける「偉大な魂」を最後まで励まし支えたのは真理の探究者としてのヴィジョンを共有する友人の魂であったのではなかろうか。

“Walk alone.

If they answer not to thy call,

Walk alone.”

(Rabindranath Tagore)

## 注

- 1) ガンディーとタゴールの論争を含め、二人の間にかわされた手紙や文書を年代順に集めた本が1997年に出版された。Sabyasachi Bhattacharya, comp. and ed., *The Mahatma and the Poet, Letters and debates between Gandhi and Tagore 1915-1941* (New Delhi: National Book Trust, 1997). この本には具体的な論争の内容や歴史的背景も詳しく紹介されていて、非常に貴重な資料である。さらにこ



の本をもとにして 2006 年には *The Poet and the Mahatma, documentary in English, 60 min., directed by Debabrata Roy (2006)* というドキュメンタリーも制作された。この小論はこの二つの新しい資料によるところが大きい。古田彦太郎氏がこのドキュメンタリーの DVD をアジア文化研究所へ寄贈して下さったことを感謝して記しておきたい。

- 2) ガンディーは西インドのグジャラート州、カチャワール半島のポールバンダールという小さな藩王国の出身であった。グジャラート地方は非殺生（アヒムサ）の誓いを教えの中核とするジャイナ教の影響も強く受けている。またアラビア海に臨み、ムスリム貿易商などが活発に活動してきたことから進取の精神にとんだ地域ともいわれる。ガンディーの生まれ育った地方の風土や歴史がガンディーの生い立ちに与えた影響については Chandran D. S. Devanesen, *The Making of Mahatma* (New Delhi: Orient Longmans Ltd., 1969)、邦訳は C. D. S. デヴァネッセン、寺尾誠訳『若き日のガンディー マハトマの生誕』（未来社、1987 年）に大変詳しい。

それにたいしてタゴールは東インドのベンガル地方の大都市カルカッタの出身である。カルカッタはイギリス東インド会社の拠点の一つとしてインドの中で最も早くからイギリス支配と関わりがあった地域である。タゴールはベンガル語を母国語としてベンガル語の発展に多に貢献し、今日でもベンガル地方では比類ない尊敬を集めている。インド国歌はタゴールの作詞作曲であるが、バングラデッシュの国歌もタゴールによるものであるのはベンガル語を文化的基盤としている地域におけるタゴールの不動の地位を知る一つの手がかりとなるであろう。

- 3) ガンディーはいわゆるカーストによると商人階層のヴァイシャ出身のモード・パニヤであるが、父や叔父は小藩王国の宰相を務めていた。ガンディー一族はヴィシシュ派のヒンドゥー教徒であり、特に母のプタリバーイの敬虔な信仰はガンディーの生涯を支える土台となった。ガンディーの「生まれと両親」『自叙伝』第一部 1 参照。

ガンディーの自叙伝はもともとグジャラート語と英語で週刊誌に連載される形で発表された。これまでいくつもの翻訳が紹介されているが、英語版からの代表的な邦訳で今回この小論に用いたのは M. K. ガンディー、巖山芳郎訳「ガンジー自叙伝」『ガンジー・ネルー』世界の名著 63 巻（中央公論社、1967 年）。英語版は M. K. Gandhi, *Autobiography or The Story of My Experiments with Truth* (orig., 1927, 1929 in 2 vols.; Penguin ed., 1982)。

最近ヒンディー語版自叙伝から翻訳された池田運訳『ガンジー自叙伝』（講談社出版サービスセンター、1998 年）や、ガンディー自身が書いたオリジナルのグジャラート語版からの翻訳として、田中敏雄訳注『ガンディー自叙伝——真理へと近づく様々な実験』1・2、東洋文庫 671・672（平凡社、2000 年）が出て、それぞれ貴重な資料となっている。

なおガンディーの名前のカタカナ表記は「ガンジー」、「ガンディー」、「ガンディー」などこれまで様々なものがあり、最近はもとの発音に近いということで「ガンディー」と表記することが定着しつつあるが、今回はいまだ一般に普及しており、著者になじみの深い「ガンディー」で統一した。

タゴール一族はもともとバラモンであったが貿易で財をなし、特に祖父は東インド会社との取引で富裕な身代をつくった。その一族は慈善活動にも積極的に関わり、文化的にも宗教的にも大きな影響力をもっていた。タゴールの父はヒンドゥー教の改革運動の旗手であったラーム・モハン・ロイと共にブラフモ・サマージ運動を熱心に支えたが、この運動の真髄は偶像崇拝や人種やカーストによる差別などの形式主義を否定し、宇宙の原則としてのブラフマーを神として崇拝することにあった。タゴールの一族については K. クリパラーニによる伝記『タゴールの生涯』（上）（森本達雄訳、レグルス文庫 89、第三文明社、1978 年）の第一章「家系」参照。

- 4) ガンディーとタゴールの二人の生涯と思想をわかりやすく紹介する著作として森本達雄『ガンディーとタゴール』レグルス文庫 219 (第三文明社、1995 年) がある。森本氏は長年この二人の思想と対話し、また二人を生み出したインド思想について近年まとめられた。森本達雄『ヒンドゥー教——インドの聖と俗』(中公新書 1707、2003 年)。

また、2001 年 5 月に日本で開催されたシンポジウムの記録として出版された、葬送の自由をすすめる会編『タゴールとガンディー再発見』(法蔵館、2001 年) の中にもガンディーとタゴールの相違や公的な論争について触れられている。

このシンポジウムは現代文明の危機という現実理解から出発し、そこからの脱却への道を指し示しているタゴールやガンディーに学ぶという問題提起で開催され、司会者として山折哲雄氏、パネリストとして我妻和男氏、長崎暢子氏、森本達雄氏というそうそうたるメンバーが講演した。主催した「葬送の自由をすすめる会」は日本での自然葬を普及しようと活動している市民グループであるが、当時の会長である安田睦彦氏による「はじめに」によると、タゴールとガンディーが問いかけているメッセージは (1) 自然と人間の調和と共生、(2) 西洋と東洋の融合と対話、(3) 人種、民族、宗教の交流と融和、であり、根底に「いのち」の尊重があり、その思想は「葬送の自由をすすめる会」を支えている哲学と深く共鳴しあっているとまとめている (『タゴールとガンディー再発見』2 頁)。

また、元ヴィシュヴァ・バラティーの副学長を務め、ガンディーとタゴールの思想に造詣の深い経済学者アムラン・ダッタ (Amlan Datta) 氏はドキュメンタリー *The Poet and the Mahatma* の中で、タゴールとガンディーの見解や立場の違いについて、二人がそれぞれ直面していた課題が異なることから生まれている、と説明し、タゴールはヴィシュヴァ・バラティーという実験の場で東洋と西洋の出会いを実現する学びの場を作ろうとしていた、そして一方ガンディーはイギリス帝国主義支配という不正義に対してインドにおける歴史的な闘争を指導しようとしていた、と述べている。また、両者は公的な論争という新しい歓迎すべき習慣を作り、お互いへの深い尊敬の上でお互いの相違を明確に表現したということを指摘している。 *The Poet and the Mahatma*。

アムラン・ダッタ氏は 2001 年に ICU を訪問し、教員、学生と貴重な対話を重ねていった。その時にダッタ氏を迎えるにあたって学生たちが自主的に作成したパンフレットが貴重な資料として残されている (『インドに学ぶ——自由を求めて生きる人の証言』ICU、2001 年 2 月、複製コピー)。

- 5) *The Poet and the Mahatma*.
- 6) Bhattacharya, Introduction, *The Mahatma and the Poet*, 36. ネルーが手紙を書いたのはタゴールの近親者であり、タゴールとガンディーそれぞれの伝記を書いた K. クリパラニである。その著作はいずれも森本達雄氏によって邦訳されている。K. クリパラニ、森本達雄訳『ガンディーの生涯』上・下、レグルス文庫 153・154 (第三文明社、1983 年)、K. クリパラニ、森本達雄訳『タゴールの生涯』上・下、レグルス文庫 89・90 (第三文明社、1978・1979 年)。
- 7) Mahatma とは the Great Soul 「偉大な魂」というガンディーに与えられた尊称。ji というのは「〇〇さん」という意味である。ガンディー自身は「マハートマ」と呼ばれるよりも「バプー」、「バプージー」(バプーはお父さん、という呼び名) を好んだという。
- 8) Gurudev とは the Great Teacher 「偉大な師」というタゴールに与えられた尊称。「グル」という言葉は宗教的な意味合いが強い。後述するようにタゴールは後半生を教育改革に捧げ、1901 年にシャンティニケタンに生徒 5 人 (一人は自分の長男)、教師 5 人で自然を最大の師として戸外で木の下で座って学ぶということを中心に据えた小さな学校を始めた。タゴール自身教師として

子供たちの教育に携わり、教科書も自分で執筆し、この学園の育成、運営に奔走した。現在この学園はインドの国立大学の一つであるヴィシュヴァ・バーラティーとして存続している。

- 9) Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part IV, Letter Number 22 (pp. 177-8), “My life’s best treasure”: Tagore on Viva-Bharati (Letter handed over by Tagore to Gandhi at the time of his departure from Sanitinetan on 2 February 1940) and Letter Number 23 (p. 178), “Their common endeavour”: Gandhi on Visva-Bharati (on the way to Calcutta, 19 February 1940). それ以前にも1935年にヴィシュヴァ・バーラティーの資金が大幅に不足し、存続が危ぶまれた時にタゴールがガンディーに助けを求めたところ、ガンディーが支援を約束し、ガンディーの要請に応じて6万ルピーもの大金を寄付する人物が現れてその危機を救ったのだった。Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part IV, 161-4.
- 10) Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part III, Letter Number 4 (p. 134), Gandhi seeks Tagore’s blessing before starting a fast (Yeravada Central Prison) 20 September 1932. また別の断食を開始するにあたって Letter Number 11 (p. 140), Gandhi’s thoughts contemplating yet another fast (Yeravada Central Prison, 2 May 1933.
- 11) *The Poet and the Mahatma*.
- 12) コミュニズム communalism は南アジアの歴史においては、宗教対立、宗派対立などと訳され、特にヒンドゥー教徒とムスリム（イスラーム教徒）の間の対立、暴動をさすが、その背景は植民地支配とその応答としてのナショナリズムが複雑に絡む近代的なイデオロギーであり、その帰結が1947年のインド・パキスタンの分離独立である。その負の遺産は今日の南アジアの民衆を苦しめ、核兵器の脅威までもたらしている。ガンディーはコミュニズムに対して、一つの家族としてのインドのヴィジョンをもって闘い続けたが、1947年の分離独立を阻止できず、翌1948年の暗殺による死に至るまでその傷を癒すことに全精力を注いだ。最晩年のガンディーのコミュニズムとの闘いについては、宇野(徳田)彩子「一つの家族としての人類意識——マハトマ・ガンディーとアブドゥル・ガッファール・カーン：二人の奉仕者」『アジア文化研究別冊』第10号、国際基督教大学アジア文化研究所、2001年の中でも検討している。
- 13) 森本達雄『ガンディーとタゴール』107-8頁。
- 14) M. K. Gandhi, *From Yeravdar Mandir, Ashram Observances* (Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1932) にはアシュラム生活の基本的目標がガンディー自身によって描かれている。これは森本達雄「イエラヴァダー・マンディルから」『ガンディー』人類の知的遺産64（講談社、1981年）、III-3にも紹介されている。

このアシュラムの誓いはスングラール・パフグナーを始め、今日におけるガンディー主義者が堅持し続けている。その誓いの中核は、真理の誓い、非暴力（愛）の誓い、純潔（ブラフマチャリア）の誓い、不盗の誓いなどである。本号の石坂論文「グローバル化の現代インドとガンディー主義」、特に第2章参照。
- 15) Ajay Skaria “Gandhi’s Politics: Liberalism and the Question of the Ashram,” *The South Atlantic Quarterly* 101:4 (Fall 2002), Duke University Press, 955-7.
- 16) サッティヤグラハとはサッティヤ (*satya*, truth) をしっかりとつかむこと (*agraha*, アグラハ, to hold on to, firmness) というサンスクリット語から、南アフリカでのインド人の人権擁護運動の過程で1906年に作られた言葉である。ガンディーの『自叙伝』第六部51「サッティヤグラハの起源」嶺山芳郎訳、246-8頁。

ガンディーは自分の生涯は「真理実験の物語」であり、「自己実現、神にまみえること、解脱

(モクシャ、自由)」という一つの目標をひたすら追究してきたと述べているが、サッティヤークラハはこの真理追究ということの意味している。ガンディーの『自叙伝』Introduction (はしがき) 参照。そしてその具体的な道筋は非暴力(アヒムサ)であることを自叙伝全体を通して証言することをガンディーは目指していた。「別れの辞」『自叙伝』。

ガンディーは始め「神は真理である」と理解していたが、むしろ「真理は神である」の表現がより正確であり誤解されないと気がついた。アシュラムの生活でも「真理」こそが常に求められことであり、誓いにおいても第一におかれている。M. K. Gandhi, “Truth,” *From Yeravdar Mandir*, chap. 1, 3-5.

インド思想の長い伝統は、真理(サッティヤ)を最上の価値としてきた。ヒンドゥー教の聖典ウパニシャッドから取られた「真理のみが勝利する」ということばが独立インドの理想として国家の紋章の下に掲げられていることは大変興味深いことである。

- 17) 例えば新約聖書における最後の晩餐におけるイエスの弟子たちへの言葉「あなたがたに私が命じることを行なうならば、あなたがたは私の友である。」(ヨハネによる福音書、第15章14節)からは恩寵としての「友」の言葉の重みが明らかである。

またヒンドゥー教の聖典中で、しばしばキリスト教の新約聖書に例えられる『バガヴァッド・ギーター』において、最高神の化身であるクリシュナが勇士アルジュナに語る言葉に友愛(ミトラ)を目指すべき理想として説いている箇所がある。例えば、「すべてのものに敵意を抱かず、友愛あり、哀れみ深く、『私のもの』という思いなく、我執なく、苦楽を平等に見て、忍耐あり、常に満足し、自己を制御し、決意も固く、私に意(こころ)と知性(ブッディ)を捧げ、私を信愛するヨーギン(求道者)、彼は私にとって愛しい」(第12章第13節)。上村勝彦『バガヴァッド・ギーターの世界』(ちくま学芸文庫、2007年)、22頁。

ガンディーは『バガヴァッド・ギーター』を英国留学中に読んで感銘を受け、南アフリカ時代から「日常必携の辞典」とし、日々読んで自らの行動のよりどころとしていた。ガンディー、蜷山芳郎訳「ギーターの研究」『自叙伝』第五部40、214-6頁。

- 18) Skaria, *Ibid.*, 976-7.

- 19) ガンディー、蜷山芳郎訳「友情の悲劇」『自叙伝』第一部4、85頁。

- 20) タゴールの生涯の転機となる重大な経験として森本達雄氏は1882年の21歳の永遠なるものにふれた経験をあげ、ガンディーを決定的に方向づけた経験としては1893年の南アフリカ到着直後に乗った列車の一等席から有色人種であるということから放り出された経験をあげている。葬送の自由をすすめる会編『タゴールとガンディー再発見』58-9頁。

ガンディー自身後年このときを「最も創造的な creative 経験」として振り返っている。ガンディーは自叙伝において、この人種差別的暴力を身に受けて駅のプラットフォームで寒さに震えていた夜に考えたことについて述べている。「わたしは、義務について考え始めた。……わたしのこうむった難題は皮相にすぎなかった。——人種偏見という根深い病気の一つの症状にすぎなかった。できることなら、わたしはこの病気の根絶やしをやってみるべきだし、そしてそのための苦難は甘受すべきである。不正の償いにしても、わたしはただ人種偏見の除去に必要な範囲に限って追求すべきである」。ガンディー、蜷山芳郎訳「プレトリアへ」『自叙伝』第三部20、146-7頁。ガンディーはこの経験を通して真理追究への歩みを自覚的に進むことになった。

タゴールの経験について森本氏は次のように述べている。「タゴールもまた21歳のときに人生の第二の誕生ともいえるべき深い精神体験をします。それは初秋の朝早くに、カルカッタの兄の家のヴェランダに立って太陽が昇るのを見ていたときでした。通りの向こうの木々の葉の一枚一枚

が陽の光に金色に輝くのを見たとき、不意に目の前の霧がはれわたり、世界が歓びに輝いているように思ったのです。そのとき詩人（タゴール）は、自分の生命が宇宙の霊と一体であることを悟ったのでした。そして、有限の時間の中に、永遠なるもの、無限なるものがやどっていることを直感したのです。この信念が、タゴールの生涯の思想と文学の基調音（キー・ノート）となったのでした」（葬送の自由をすすめる会編『タゴールとガンディー再発見』59頁）。

この経験についてクリバラニは『タゴールの生涯』において「その印象は終生、彼（タゴール）の心から離れることはなかった。」と述べている。そしてその経験は四日間続いた。「この経験は長時間にわたって持続し、いっさいのものを彼が目や耳だけでなく、全存在をもって見、聞くようになるという、以前とは違った目覚めの段階へと彼を導いた。そしてそれは果てしない驚異のように思われた。経験は四日間つづいたが、その間彼はすべてのものがいっそう活き活きと、いっそう真実に、いっそう美しく、そしていっそうよこばしく見えるときの、あの激しい精神の高揚状態にいたのである。四日目の終わりに、この異常な歓喜の状態は過ぎ去った」（K.クリバラニ『タゴールの生涯』上、92-3頁）。

- 21) 森本達雄氏の発言。葬送の自由をすすめる会編『タゴールとガンディー再発見』30頁。
- 22) Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part I, Letter Number 7 (p. 49) “Tagore’s letter written on the eve of the Jallianwala Bagh massacre” (Letter sent to Gandhi, then published in *The Indian Daily News*, April 16, 1919).
- 23) ルイス・フィッシャー、古賀勝郎訳『ガンジー』（紀伊國屋書店、1968年）391頁。原著はL. Fischer, *The Life of Mahatma Gandhi* (1st ed., 1951; repr., Grafton Books, 1982)。
- 24) ガンディーの思想的マニフェストとして知られる著作『ヒンド・スワラージ』はガンディーが南アフリカで活動中に執筆されたものである。M. K. Gandhi, *Hind Swaraj or Indian Home Rule* (orig., 1909; Ahmedabad: Navajivan, 1938), 邦訳はM. K. ガンディー、田中敏雄訳『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』（岩波書店、2001年）。そこでガンディーは当時のインドのナショナリズムにおいてキーワードとなっていた「スワラージ・自治 (self-rule)」という言葉に独自の理解を示し、痛烈な近代文明批判を展開している。

長崎暢子氏はこれまでもガンディーの『ヒンド・スワラージ』の重要性を繰り返し提起しているが、最近の「南アジアのナショナリズムの再評価をめぐって——ガンディーのスワラージ」『アジア研究』第48巻第1号、2002年1月において、ガンディーの独自性として三つのポイントをあげ、その二つ目として当時のインドのナショナリストたちの多くが近代化を肯定的にとらえ「伝統」を改革すべきとしていたのに対し、むしろガンディーは西洋近代文明を乗り越えるため、インドに存在してきた「伝統」に基づいた真の文明の樹立を訴えた、ということにあると指摘し、「『伝統の近代化』でなく『伝統』を未来像として提示した」ことをあげている（11頁）。ここにガンディーを、農村を単純に理想化し伝統へと回帰することを主張した「伝統主義者」として理解するのではなく、伝統に未来像を見いだしながら日々新たにしていこうことを提起したことの重要性が明確にされている。

一方タゴールも詩人、作家としての活動に限定されず、ベンガルのタゴール家の所領であった農村の管理を任せ、そこで農民たちの苦しみを自分のものとし、その生活の改善を自らの課題として意識するようになっていた。クリバラニ『タゴールの生涯』上、133-4頁。

またタゴールは独自のスワラージ理解をもってガンディーが登場する以前のインドのナショナリズムと積極的な関わりを持ち、政府に抗議文書を送ったり、人々を奮い立たせるような愛国歌を作った。しかしやがて排他的な政治的運動や内紛への失望からナショナリズムの戦線から撤退

したとき、それによって周囲から厳しい非難を受けた。クリパラーニは「自らが正しいと思うことは、どんなに世間の痛罵をあびようとも、断じて曲げなかったと言うこと、これこそタゴールの名誉とすべきではないだろうか。このような態度もまた、英雄的行為であった。」と述べている (K. クリパラーニ『タゴールの生涯』上、202頁)。タゴールの譲ることのできないスワラージ理解とは、それは真の精神の自由を希求したものであった。タゴールはナショナリズムの第一線からは身を引いたが、新しい教育や農村の再生に向けて、あらゆる努力を惜しまなかった。その具体的な実験の場がシャンティニケタンの学園であり、シュリニケタンの農村改善運動であった。

- 25) ガンディーは南アフリカ時代から、アシュラム（修行を目的とし、自給自足を目指して共同生活を営む道場）を活動の拠点としてきた。南アフリカでのフェニックス農園、トルストイ農場に始まり、インドへ帰国してからもグジャラートのサバルマティでのサッティヤグラハ・アシュラム、インドのほぼ中心に位置するワルダールのセヴァグラム・アシュラムなどを設立しそこでの誓いを中心としたコミュニティーづくりに膨大な時間と労力と愛情を惜しみなく注いだ。

人種差別が正当化されていた南アフリカの社会において、このアシュラムでは人種、宗教、文化の相違をこえて共同生活を営んでおり、その存在自体が当時の常識への果敢な挑戦であった。この共同体が南アフリカでのサッティヤグラハ運動を支えたのである。ガンディーはこうした共同体を営む過程で、自給自足を目指した農業、異なる文化的背景をもつ子供たちの教育などに自ら真剣に関わっていった。南アフリカでの手探りの実験については M. K. Gandhi, *Satyagraha in South Africa* (1st ed., 1928; repr., Ahmedabad: Navajivan, 1972), 邦訳 M. K. ガンディー、田中敏雄訳注『南アフリカでのサッティヤグラハの歴史1 非暴力不服従運動の誕生』『南アフリカでのサッティヤグラハの歴史2 非暴力不服従運動の展開』東洋文庫 736・738（平凡社、2005年）に大変詳しく述べられている。

自叙伝においてガンディーはサッティヤグラハ・アシュラムを1915年に設立した際にこの道場が不可触選民の家族を受け入れたことによって巻き起こした批判について言及している（「道場（アシュラム）の建設」『自叙伝』第7部64）。これも当時のインドの常識とされていた激しい差別への果敢な挑戦であった。

一方、タゴールが1901年に当時何もなかったシャンティニケタンに家族で移り住んでの実験を始めたとき、すでに高い文学的評価を与えられていたにも関わらず、新しい、しかも厄介な実験を始めたのだ。それはタゴールにとって周囲の批判や無理解、理想の実現に伴う様々な困難、運営のための資金集めの苦勞を引き受けることであり、そして最愛の父、妻、子供たちと次々と続いた大切な家族や同志の死などが重なり、大変な苦しみ、悲しみと試練の連続であった。クリパラーニによるとこの実験は当初「詩人の気まぐれ」と世間から揶揄されたが、タゴールは亡くなる日までこの実験を自分の「サーダナー」（修行の道）として心を砕き、その努力を支えていたのは使命感であったという（クリパラーニ『タゴールの生涯』上、191-2頁）。

- 26) 当時ゴーカレーは、インドにおけるナショナリズムの主要な政治的組織であったインド国民会議派 (Indian National Congress) の穏健派の有力な指導者の一人であった。ガンディーは1896年、1901年にインドに一時帰国していたおりにゴーカレーに出会い、インドの政治について学んだ（ガンディー、蠟山芳郎訳「インドにて」『自叙伝』第三部28、173-6頁。「ボンベイにて」同第四部38、205-9頁）。

ガンディーは必ずしもゴーカレーの政治的見解を踏襲してはいなかったが、ゴーカレーがインド奉仕協会を組織し、インドの民衆のために献身的に働いたことを高く評価していた。ゴーカレ

ーの死にあたってのシャンティニケタンでのスピーチから、“62 The Message of Gokhale” (February 20 1915), *The Ashram, June–July 1915*, reprinted in *The Moral and Political Writings of Mahatma Gandhi, vol. 1, Civilization, Politics, and Religion*, ed. by Raghavan Iyer (Oxford: Clarendon Press, 1986), 126–8.

- 27) ガンディー、蠟山芳郎訳「シャンティニケタンにて」『自叙伝』第七部 62、184–7 頁においてガンディーを始めとしたフェニックス農園のメンバーがシャンティニケタンで新しい自助の実験（自分たちで料理や掃除をする、肉体労働をするなど）を提起したときのエピソードが語られている。フェニックス農園のメンバーは 1914 年 11 月から 1915 年 4 月まで滞在した。Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part I, 41.
- 28) ガンディーは 1940 年 3 月にシャンティニケタンを訪問した時にも南アフリカから帰国した際のシャンティニケタンの暖かいもてなしについて感謝を込めて想起した。*Harijan*, 9 March 1940. Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part I, 41. ハリジャンとは「神の子」という言葉で、不可触賤民として差別されていた人々の新しい呼び名としてガンディーが提起し、この非人間的差別の制度の撤廃を訴えた。ガンディーは自ら編集発行していた週刊誌を改題して『ハリジャン』とした。

ヴィシュヴァ・バーラティーでは今日でもガンディーがシャンティニケタンを訪問した日を記念して毎年 3 月 10 日をガンディーの日とし、自助や労働の精神を喚起するそうである。

- 29) Bhattacharya, *The Mahatma and the Poet*, Part I, 44.
- 30) 葛西實氏は「C・F・アンドルウズとインド」『アジア文化研究』第 13 号、国際基督教大学アジア文化研究所、1981 年においてアンドルウズの知的遍歴に焦点をあてて、出会いと対話によって深められていく三つのレベルのインド理解について検討している。第一のレベルは客観的対象としてのインドであり、第二のレベルはインドの友人との対話を通して現れる自己理解・世界理解としてのインド理解である。アンドルウズとガンディーとタゴールのまじわりが第三のレベルインド理解への招きであり、普遍的な人間の意味を証言しているという問題意識は葛西氏によって提起され、以来長年にわたって筆者も課題として考えてきたものである。
- 31) ガンディーとアンドルウズの友情の物語を二人の手紙や文書をもとに感動的に再構築したのが David McI. Gracie, ed. and narrated, *Gandhi and Charlie—The Story of a Friendship* (Cambridge, Mass: Cowley Publications, 1989) である。
- 32) タゴールは多くの家族の死による悲しみや自分自身の病気の苦しみなどを乗り越えて、1912 年 5 月にイギリスへ向かったが、その際に自分のベンガル語の詩を英訳したノートを持参した。そのノートをイギリスで友人の画家ウィリアム・ローゼンシュタインに見せると大変感動して、ローゼンシュタインがさらに詩人イエーツに読ませ、イエーツは深く感動して後にこの詩集を出版する時には心のこもった序文を書いた。またローゼンシュタインは自宅でタゴールによる詩の朗読会を 6 月に開いた。「朗読が終わったときに一瞬部屋は重い沈黙につつまれたままであった。……それは感動の沈黙であった」(R・タゴール、森本達雄訳註『ギタンジャリ』レグルス文庫 209 (第三文明社、1994 年)、173 頁)。このとき参加したアンドルウズにとってこの経験は決定的であった。「その驚き、その感動は、つまりは『人間の心の普遍的なユニティーの驚嘆であり、人類の一つなる精神の不可思議の驚嘆』であった」(森本達雄訳註『ギタンジャリ』174 頁)。そしてローゼンシュタインとイエーツの働きかけによって詩集『ギタンジャリ』(神の歌)はイギリスで出版され、この一冊の詩集によってタゴールは 1913 年にノーベル文学賞を受賞したのである(クリパラーニ「西洋との出会い」『タゴールの生涯』上、第 10 章、191–2 頁)。

- 33) ゴーカーレーは南アフリカのインド人の窮状をガンディーからの訴えで知り、健康上の問題を抱えていたにも関わらず自ら南アフリカへ赴き、政府要人との会談や南アフリカのインド人コミュニティとの対話などを積極的に行なった。その時に全面的にガンディーはゴーカーレーを支え、ゴーカーレーを政治的師と仰ぐに至った。そのゴーカーレーの南アフリカ訪問については、M. K. Gandhi, “Gokhale’s Tour,” “Gokhale’s Tour (Continued),” *Satyagraha in South Africa*, chaps. xxxvi and xxxv, 236–247 に詳しい。

ゴーカーレーの訪問は南アフリカのインド人コミュニティの運動にとって大きな転換点となった。その後もゴーカーレーはインド国内での南アフリカ問題について積極的に講演し支援を要請した。デリーでのゴーカーレーの講演を聴いてアンドルウズはセント・ステイブンス・カレッジの職を辞し、自分の財産をすべて寄附し、親友 W. W. ピアソンと共に南アフリカへ赴いたのだった。McI. Gracie, “South Africa,” *Gandhi and Charlie*, chap. 2, 25.

- 34) McI. Gracie, *Gandhi and Charlie* の扉には亡くなる直前のアンドルウズを見舞っているガンディーの写真と、“Nobody probably knew Charlie Andrews as well as I did. When we met in South Africa we simply met as brothers and remained as such to the end.” というガンディーの言葉が掲げられている。

アンドルウズは南アフリカの港ダーバンでガンディーに初めて出会った時に、インドの人々が目上の人や尊敬する師に会った時に行なうように、かがんでガンディーの足元をさわるという最上の敬意を払う挨拶を行なったところ、ガンディー自身も驚き「どうぞそんなことはなさらないで下さい、かえって私には屈辱です」とアンドルウズをおしとどめたが、アンドルウズの行為が南アフリカのイギリス人たちに与えた衝撃は大きかった。McI. Gracie, *Gandhi and Charlie*, 26.

- 35) “To Tagore” Jan. 6, 1914 from Durban, C. F. Andrews, *The Gandhian Thought*, vol. 1, ed. S. R. Bakshi (Delhi: Akashdeep Publishing House, 1990), 103–105. 原文は “I had no difficulty in seeing from the first Mr. Gandhi’s position and accepting it: for in principle it is essentially yours and Mahatmajī’s— a true independence, a reliance upon spiritual force, a fearless courage in the face of temporal power, and withal a deep and burning charity for all men.” ここでの「マハトマジー」はガンディーのことではない。

- 36) 例え ば C. F. Andrews, *Mahatma Gandhi—His Life and Ideas* (orig., Macmillan, 1930; with a New Foreword by Arun Gandhi, Woodstock, Vermont: Sky Light Paths Publishing, 2003) には chap. 15 “The Great Sentinel” (pp. 182–200) という章があり、1920 年のガンディーが指導した非暴力的非協力運動 (Nonviolent Non-Co-Operation Movement) に対するタゴールの批判とそれに対するガンディーの応答を紹介している。タゴールは非暴力的非協力運動、特に英国製の布を焼き払うことに対する人々の盲目的な熱狂を嫌悪し、またインドの経済問題をガンディーが主張するようにチャルカ (糸紡ぎ車) による手紡ぎ糸と手紡ぎ布がすべて解決するとは単純すぎると批判した。また未だそれに変わる国民的教育制度ができていない段階で政府の教育制度から若者をやめさせることにも不安と抵抗を表明した。ガンディーとタゴールはアンドルウズとともに長時間話し合ったが、意見の相違は埋まらなかったとアンドルウズは述べている。その理由をアンドルウズはそれぞれの気質の違いがあまりにも大きく共通の知的理解に至るのが大変困難であることをあげ、しかし、友情という精神的な絆は全く壊れなかったし、タゴールのサッティヤグラハ (soul-force) への確信は全く揺らいでいないと述べた上で、二人の公表した論争の内容を紹介している。C. F. Andrews, *Mahatma Gandhi—His Life and Ideas*, 186–7.

- 37) 葛西實「C・F・アンドルウズとインド」126–8 頁。



- 38) 葛西實「C・F・アンドルーズとインド」126頁。
- 39) 『ハリジャン Harijan』1940年4月13日。葛西實「C・F・アンドルーズとインド」127頁。
- 40) “Statement to the Press” (April 5, 1940), *Harijan*, (13-4-1940), *Collected Works of Mahatma Gandhi*, vol. 71 (New Delhi: The Publication Division, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India, 1978), 394.
- 41) 葛西實「C・F・アンドルーズとインド」127頁。
- 42) “Mohan, Swaraj is coming. Both Englishmen and Indians can make it come, if they will.” (McI. Gracie, *Gandhi and Charlie*, 188. 「モハン」というのはガンディーの名前モハンダスからの愛称でアンドルーズが親しみを込めてガンディーを呼んで使っていた。
- 43) 葛西氏の問題提起を受けとめた学生たちから葛西氏の最終講義のテーマが提起されたがその記録が『アジア文化研究』にまとめられている。葛西實「インドの祈りと人類のヴィジョン——“Mohan, Swaraj is Coming.”」(最終講義2000年2月25日の記録)『アジア文化研究別冊』第10号、国際基督教大学アジア文化研究所、2001年。
- 44) 葛西實「C・F・アンドルーズとインド」128頁。
- 45) *Collected Works of Mahatma Gandhi*, vol. 74, 218.
- 46) “Gurudev” (SEVAGRAM, August 30, 1941), *Collected Works of Mahatma Gandhi*, vol. 74, 276.

## ガンディー・タゴール関連年表

- 1893年 ガンディー南アフリカへ渡る。
- 1912年 5月 タゴール渡英。英語版の『ギタンジャリ』を出版。C. F. アンドルウズ、タゴールに出会い、シャンティニケタンの実験に加わる。同年ゴーカレー南アフリカを訪問。
- 1913年 タゴール、ノーベル文学賞受賞。同年末ゴーカレーの要請を受けてアンドルウズ南アフリカへ出発。
- 1914年 1月 アンドルウズ南アフリカへ到着、7月インド人救済法が成立しガンディーは帰国することに。
- 1914年 11月から1915年4月まで フェニックス農園のメンバーがシャンティニケタンで滞在。
- 1915年 インドに帰国したガンディー、2月にシャンティニケタンに滞在。3月タゴールに会う。
- 1918年 書簡交換、インドの国語としてのヒンディー語について。
- 1920年 タゴール、アームダバードのガンディーを訪問。
- 1921年 非暴力的非協力運動に対するタゴールの批判とそれに対するガンディーの応答。外国製布製品を焼き払うことについて、チャルカ・糸紡ぎ車、英国教育のボイコットについて。
- 1922年 タゴール、非協力運動の暴力性について批判。
- 1924年 チャルカ（手紡ぎ車）の推進運動についてタゴールの批判。
- 1932年 獄中で断食を執行したガンディーへタゴールから激励の電報。自ら牢獄を訪ね、断食を終えるにあたって歌を歌った。
- 1934年 ビハールの大地震についてのガンディーのコメントにタゴール抗議。
- 1935年 タゴールからガンディーへヴィシュヴァ・バーラティー運営のための資金援助の要請の手紙。
- 1936年 6万ルピーの寄付をガンディーから送る。提供者は匿名希望。
- 1939年 タゴールよりベンガルのスパス・チャンドラ・ボースを弁護する手紙。
- 1940年 ガンディー、2月にシャンティニケタンを訪問。タゴールとの最後の対話。4月5日アンドルウズ死去。
- 1941年 8月7日タゴール死去。
- 1947年 インド分離独立。
- 1948年 1月30日ガンディー暗殺。